

T R A N S

01

Transdisciplinary Arts

T R A N S

01

Transdisciplinary Arts

## 創刊のことば

Compositeではなく Transdisciplinary——。複合芸術の複合とは、たんなる表現や理論、素材や方法の「合成」ではありません。外部に「越境」し、他者に学び、自己を変容させながら育んだ思想を未来へ再配置すること。大学院複合芸術研究科は、これらの創造的な道りを歩むことを複合芸術の研究活動として考えています。

2017年の開設以来、本研究科を足がかりに、さまざまな研究者や大学院生が複合芸術という未知の道程を切り開き、かつ歩んできました。本誌『TRANS』は、それらの足跡を振り返りつつ、一步また一步と、前へ前へと、それらの道筋をより広く、より深く開拓するビークルとして創刊したメディアです。一般的な広報誌にとどまらず、誌面においても複合芸術の実践を目指すという意味を込めて、その名称は『TRANS』としました。

かつて鶴見俊輔は「<sup>クロスロード</sup>交叉路」という考え方を示しました。初めから終わりまで、目的と方向を完全に限定するのではなく、その時々で道を共有すること。途中から合流してもいいし、別の道に逸れていってもかまわない。道そのものを交叉路として考えれば、越境する足取りもあるいは柔らかくなるのかもしれない。

秋田という辺境のトポスでいかなる複合／越境が生まれるのか、注目してください。

『TRANS』編集長 福住 廉

## Project / Comment 006 - 023

本研究科の教員・助手による研究活動をプロジェクトとして、それらのプロジェクトに詳しい識者による論評をコメントとして、それぞれあわせて紹介

006	身体のパルバジア	山川冬樹
010	棧橋	鴻池朋子
012	共鳴する煌めき——粘菌研究クラブについて	唐澤太輔
016	「私」でも「私たち」でもなく Not “I” or “We”	大小島真木
018	普通の風景で普通に踊る	大東忍
022	歩くこと・踊ること・描きだすこと 大東忍の芸術実践	居村匠

## Award 025 - 031

本研究科が修了生の中からすぐれた研究・作品に授賞する複合芸術研究賞の歴代の受賞者とその作品を総括

025	複合芸術研究賞	
026	現代アートと他分野との間に立つ仲介者のあり方——地域型アートプロジェクトの現場調査から	蛭間友里恵
027	妖怪テレビ	求源
028	個の身体から思考する——「キウイ大学校」の実践を通して	日比野桃子
029	人生のプロセスを区切る図像表現と時間観——「老いの坂」と「人生の階段図」を中心として	林文洲
030	「地域に擬態する」アートプロジェクト——コミュニティ指向のアートプロジェクトがアートの役割と定義を拡張することに関する研究	谷口茉優
031	多元化された性のための彫刻	岩瀬海

## Work 032

複合芸術に関わるヴィジュアル・イメージ

032	根や茎	堀至以
-----	-----	-----

## Voice 033 - 041

本研究科に在籍する大学院生による研究の実態のほか、博士課程の院生が企画している複合芸術会議の記録、修了生の現在の活動について

033	文化の動きに伴うこと	藤本悠里子
034	アーティストとしての原点	高梨麻梨香
035	日本と中国の福祉事業の連携を目指して	李銳
036	博士研究より——行為的アージュルを立ち上げる	秋田光軌
038	自然の叡智をいかす人の営み	鈴木望美
040	複合芸術会議	

## Essay 042 - 045

本研究科の教員による随筆や試論

042	City of Jinn——精霊の街	岸健太
044	複合芸術とは	飯倉宏治

## About 046 - 051

本研究科のカリキュラムや入試について

046		
-----	--	--

## Chronology

本研究科における複合芸術をめぐる考察と活動の軌跡をまとめた年表

折込		
----	--	--

## 身体バルバジア

山川冬樹

本学の教員に赴任してから3ヶ月が経った。やはり環境は人間に多大な影響を与えるのだろう。早くもこの秋田の風土が、私の感覚や物事の見方に変化を引き起こしている。

たとえば、生活のふとした時に、歌が口をついて出るようになった。東京に暮らしていた頃は、たとえるならダムを意図的に決壊させるような気持ちで自らを奮い立たせないと歌えなかったのが、秋田で暮らすうちに声帯にかかった鍵が開くように、喉から歌が自然に漏れて出てくるようになったのだ。

一方で私の眼も変調をきたしつつある。それは東京の美術館でよく感じる。現代美術には文脈を踏まえた上で記号を読み解く知的なゲームの一面があるが、そういうシニフィアンとシニフィエの答え合わせを目的としたような作品が、退屈に見えて仕方がなくなったのだ。赴任前に来秋した冬、列車

の車窓から見た雪景色の光輝に網膜を串刺しにされたからだろうか、すっかり裸になった私の眼はシニフィアンでは充たできないものを見たいと強く欲するようになっていく。

おそらく身体感覚が再び野生化しているのだろう。思えば私の中には昔から動物的な衝動が渦巻いていて、子どもの頃は四つん這いになりさまざまな動物たちに憑依して遊ぶのが好きだった。その遊びがいつの間にか表現に結びつき、私のキャリアは自然にライブパフォーマンスから始まった。美大に進学したものの、内心ずっと「見る」と「見えるもの」を疑い続けていた。東京の美術館に作品が収蔵され、美大で教鞭をとるようになった今も、自分がいわゆる「美術家」とは根本的に違う生き物のような気がしてならない。

2015年、そんな私のことを面白いと思っただけだったの

か、秋田出身の鴻池朋子さんから、神奈川県民ホールギャラリーでの個展「根源的暴力」でコラボレーションのお誘いをいただいた。それまで鴻池さんには（今思うと失礼ながら……）「高い画力を持った、東京のコマーシャルなアート界を代表する人気アーティスト」というイメージを持っていたが、お会いしてすぐにそのイメージは覆された。

鴻池さんを「こういう人だ」と言葉で表象することは難しい。しかしこれはとらえどころがないという意味ではない。むしろ鴻池さんほど己の感覚をとことん「具体的」に自覚しながら生きていく人を私は知らない。だからこそ誰よりも絵を描けるにもかかわらず、絵が何かを具象してしまうことを疑っているのだろう。具象的な絵画ほど「具体的」という言葉の本来の意味から遠いものはない。ホワイトキューブの静寂の中で作品に向き合う時、私たちは「眼だけになる」よう要求されるが、眼に見えるものこそ至上とするこの視覚偏重主義は、近代社会の基本構造をなす監視の制度とも、現在の私たちを翻弄するメディアの支配とも地続きにある。前述した私

の「見る」と「見えるもの」への疑いの根っこもここにあり、鴻池さんと私はこの疑いで通じ合ったように思う。

コラボレーションのなかで、鴻池さんは自分の作品を並べた展示室にまるで動物でも放り出すかのように私を放ち、自分も一緒に声を出しながら動物に戻って面白がっているようだった。「山川さん、その絵を叩いてみて！」と言われた時は少し戸惑ったし、ある時は「（体の）臭いが良かった！」との感想をいただき、恥ずかしくなったこともある。しかしそれは世界を嗅ぐように、触れるように、聴くように、味わうように、「見よう」とする鴻池さんへの最大の賞賛の言葉だったのだと思う。

ちょうどその頃、私は「瀬戸内国際芸術祭」への参加が決ま



り、瀬戸内海に浮かぶ離島のハンセン病療養所、大島青松園でのフィールドワークを本格的に始めていた。そんな私が「根源的暴力」展のなかでとりわけ強く惹かれたのは《名付けようもないもの》という不思議なかたちをした素焼粘土のシリーズだった。後鰓類こうさいのようにも粘菌類のようにも生肉の塊のようにも歪んだ人間の顔のようにも見えるそれらの物体が、私にはどうしても、らい菌に蝕まれた人体に見えてしまって、思わず「これってハンセン病ですよね……？」と尋ねてしまった。すると鴻池さんは驚いた様子で「どうしてわかったの？」と答えた。

もちろん鴻池さんはその作品でハンセン病を表したのではない。《名付けようもないもの》には、生命の誕生や進化、有機物の腐敗や肉体の病変にいたるまで、万物が流動し変質する過程で、かたちが生まれたり失われたりする普遍的な有り様が現れている。だからそれは私の中でたまたま事故のようにハンセン病のイメージにつながったに過ぎない。しかし、聞くと鴻池さんの以前のアトリエは国立療養所多磨たま全生園ぜんしょうえんの

思えばこうした鴻池さんとの関わりのなかで、私は本学に赴任するよりもずっと前から「秋田」に出会っていたのだ。ここはどこからも遠く隔絶されている。それ故にこの「バルバジア」には何かがある。「秋田」とは地図上の地域区分のことではなく、私たちの身体感覚を深層でつなげるひとつの内的空間なのだ。

秋田県が国の重要無形文化財の最大の宝庫であることや、戦前のモダニズムから戦後のアヴァンギャルドにいたるまで、



近所にあったそうで、よく散歩に出掛けては資料館で患者さんの姿を写した写真を眺めていたという。鴻池さんの「どうしてわかったの？」とは、かつて何気なく療養所へ通いながら見ていたイメージが、一旦無意識の海に沈んだ後で、時を経て他者の眼によって引き揚げられ、思いがけなく自分に戻ってきたことへの驚きだったのかもしれない。これが縁になってか、鴻池さんも「瀬戸内国際芸術祭」の大島参加作家となり、今度は大島青松園でよくお会いするようになった。そして二人とも瀬戸内海に浮かぶこの島を、眼でなく皮膚感覚で「見よう」としたのだろう。鴻池さんも私も、それぞれの作品の中で全身で海に浸かっているのである。

身体表現の分野において最も重要な先駆者たちを輩出してきたこと、そして鴻池さんのような特異な美術家を生んだことを思い起こしてみても、秋田というトポスには私たちの身体を刺激し、感覚を活性化させ、パラダイムに転換を引き起こす強い力が潜んでいることがわかる。とすると私の身に起きているこの変化も、単に私的なものではなく普遍的なものであるに違いない。そして秋田に美術大学があることの意味も、身体と感覚をめぐるこの普遍性にあると言えるだろう。

## やまかわ・ふゆき

秋田公立美術大学美術学部アーツ&ルーツ専攻、大学院複合芸術研究科准教授。美術家、ホームメイ歌手。1973年ロンドン生まれ。専門は現代美術、身体表現、映像音響、ハンセン病史。自らの声と身体を媒体に、視覚や聴覚、皮膚感覚などに訴えかける表現で、音楽、美術、舞台芸術の境界を超える。国内外のアートフェスティバルや音楽フェスティバルに参加。これまでに16ヶ国でパフォーマンスを上演。

山川さん、今どのあたりを歩いていますか？

前回お目にかかったのは、たしか1年前の夏、瀬戸内海の大島青松園だったか。夕方になって作業から戻り、共同炊事場でそれぞれが夕飯をつくり始め、いつものように私はこっそり持っていたビールを配って、ささやかに乾杯したのでしたね。

大島は島全体がサナトリウムで、そこで働く人たちが最終船で高松などへ帰ると、静寂な島がより一層静まり返ります。遠くから微かに盲導鈴と潮騒が聞こえるくらい。そんな島の長い夜に、軽く酩酊した山川さんは、いつも冗談を交えながら、心地よいグルーブで、さまざまなお話をしてくれました。考えてみると、夜の食堂に低く響く語りの声の振動から、私はそれまで何ひとつ知ろうとしなかったハンセン病史のことを知ることになったのです。夜の声には何かが複数います。

ホームイにも振動を伝ってやってくる何かがたくさんありますね。「語る」という一連の呼吸、血液の反芻、ものをかたどる、こういう生きものの動作は、私が大島で散々迷い彷徨った挙句、北の山で若い患者たちが手で掘った相愛の道を「発見」したことにもつながっているように思います。そうか、歴史は呼吸でも伝えていけるじゃん、と。

初めてお会いしたのは2015年、私の個展「根源的暴力」でした。一緒にパフォーマンスをしましたね。会場が暗転し遠くから遠吠えが聞こえると、《皮綴帳》<sup>かわづみちょう</sup>の裂け目から上半身裸で口にカンテラを啜えた山川さんが、四つん這いでぬっと会場に現れました。そして何かの生きもののように吠え、作品を叩き、場内を駆け周るのですが、こころへんから私の記憶は少し朦朧<sup>もろうとう</sup>とします。というのは、床に座っていた私の横

を、登場したばかりの山川さんがすっと通り過ぎたその時、強烈な匂いが私の鼻を襲い、脳天まで達してクラッと目眩を覚えたのです。強い臭気に包まれて息苦しくなったほどです。咳が出そうなのを唾を飲み込んで必死に堪えます。観客に気づかれないように鼻呼吸から口呼吸に切り替えて匂いを遮断できた頃、ようやく楽になって自分の朗読を始めました。

なんとか終了し会場が明るくなった途端、私はすぐさま関係者に「この山川さんの強い匂いは何!？」と尋ねたのですが、みんな「匂いなんて何も感じませんよ」とポカンとしています。こっそり山川さんの側についてクンクンと嗅いでみましたが、いたって爽やか、汗の匂いすらしません。あれはなんだったのかな。その時は誰もが無我夢中です。

私は仕事柄よく旅をしますが、呼吸は外から入ってきた息がこの体を巡り旅をするようなこと。そう考えると山川さんが止めるその心臓とは、呼吸の旅の折り返し地点にあって、きちんと生きて還ってくるための道しるべのようなものかもしれません。心臓のドクンという流れを自らなくすことは、あ、止まったな、じゃあここで今日は帰ろう生きようと下山ができるわけです。それは心電図モニターとはまったく違う旅。そうですね、こうやって私が日々遊んでいるのも、きちんと自分で折り返し地点を見つけて、生きて還ってくるために何かしているのかもしれないね。

高麗にて

こうのいけ・ともい

秋田県生まれ、埼玉県日高市と秋田県北秋田市に在住。玩具と雑貨のデザインを経て1998年より絵画、彫刻、アニメーション、絵本、歌など多様なメディアを用いたトータルインスタレーションを発表。旅を通してサイトスペシフィックな展示も行い、芸術の根源的な問い直しを試みている。2024年夏、青森県立美術館個展「みる誕生(仮)」開催。

## 共鳴する煌めき——粘菌研究クラブについて

唐澤太輔

粘菌（変形菌）は、アメーバ状態（これを変形体という）のとき（写真1）、バクテリアやキノコなどを捕食する。一方、強い光が当たったり飢餓状態になったりすると、瞬く間にキノコ状になる。このキノコ状のものは子実体と呼ばれている（写真

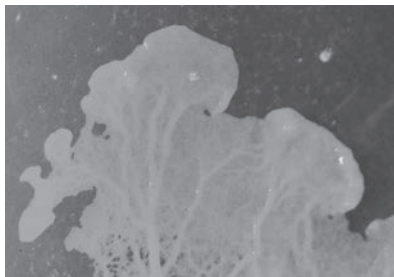


写真1：粘菌の変形体（種不明）撮影：筆者

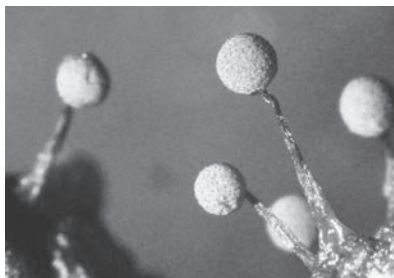


写真2：粘菌の子実体（フシアミホコリ）撮影：筆者

2）。子実体は、胞子を飛ばす。朽木などに落下した胞子からは、小さなアメーバが出てきて、それらが合体し、次第に大きな変形体になっていく。

この奇妙なライフサイクルと生態を持つ粘菌をじっくり観察し、さまざまなかたちで表現しているのが、粘菌研究クラブである。本クラブ設立のきっかけは、私が2019年の夏、本学体育館裏の資材置き場で巨大な粘菌（ススホコリ／*Pulvis sp.*）を発見したことにある。伐採されたポプラの木のの上に、艶やかな黄色のススホコリがへばりついていていた。この瞬間をもって、どっぷりと粘菌の世界に浸かることになった。後から聞いた話によると、このポプラの木々（他にはメタセコイアも数本は、大学院棟建設のために伐採されたものだという。なかには短大時代の記念樹もあるそうだ。これらの木々は朽ちており、資材として利用されることはほとんどなかったが、別

のかたちで活用されている。つまり、粘菌研究クラブがここに生息する粘菌をモチーフに、日々制作に励んでいるということだ。

たとえば、2020年12月には、メンバーの一人である山田汐音（学部4年生）が監督となって《粘菌研究》というタイトルの映像作品を作った。ここでは、私たちの身体を使って粘菌の変形体をトレースすることをテーマに、みんなで大きな黄色の布を被ってゆっくり動いたり、黄色の軍手をつけて粘菌の動きを模倣したりした。約6分半のこの映像作品は、その後、とあるアートコレクターの目にとまり、彼のコレクションに加えられることになった。それが藪本雄登（本研究科博士課程2年生）であった。彼は法律事務所を経営しながらアウラ現代芸術振興財団の代表理事を務める一方で、2021年から、自身の地元和歌山県で「紀南アートウィーク」という芸術祭を開催している。当時はまさか彼が本学の博士課程に入学（2022年4月）することになるとは夢にも思っていなかった。粘菌が結んだ奇縁だろうか。

粘菌は、対象の形状や性状を知る能力としての触覚が非常に発達している。そして、この能力をもって餌を的確なルートで見つけ出す。私たちは、現在に至るまで、粘菌の触覚作用に思考を巡らせてきた。その過程で、複数人でカラフルな樹脂粘土を手指のみを用いてガラス窓にひたすら貼り伸ばしつなげていくワークショップを繰り返し実践してきた（写真3）。そこに生まれるかたちは、通常の時空間感覚を超えた個々の無意識の蠢きであり共鳴であった。樹脂粘土が持つ独特な感触と扱いやすさ、そしてその色彩の鮮やかさは、子どもたちに非常に評判で、「日常をととのえる」展（はじまりの美術館、2022年）をはじめ、各地で「粘菌模触実験ぺたぺた・もによもによ」と題したワークショップ

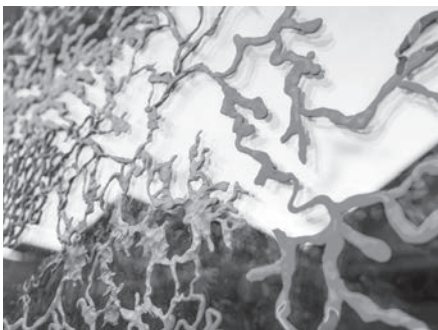


写真3：「粘菌模触実験ぺたぺた・もによもによ」撮影：草薙裕



を開催してきた。

ワークショップで子どもたちに粘菌を説明するには苦労した。専門用語 (Jargon) を用いずこの生物を説明することの難しさを痛感した。一方で私たちは、鑑賞者やワークショップ参加者同士が、「ぐにやぐにやしているね」「もつとびよーんとした方がいいんじゃない？」などの言葉でお互いスムーズに会話している点に気づいた。つまり、擬音語・擬態語を用いて粘菌を言語化することの有用性を発見したのである。振り返れば「ぺたぺた・もによもによ」というタイトル自体まさにオノマトペではないか。粘菌の動態・生態を適切に表現する方法としてのオノマトペの使用——。私たちは、粘菌を深く身体化したときに出てくるオノマトペを造語し始めた。たとえば、「ネチャンケ」「チュタチュタ」「ドツピンドツツン」というふうには、次々に作り出し、粘菌のライフサイクルを言葉で書き上げた。この造語作業には、大学院生、学部生、助手が多く参加してくれた。ちなみに当時3歳だった私の息子の造語も入っている。「とても小さな」という表現をうまく

は揺らぎながら、渦を巻くように上昇していく。私たちは、このイメージをより効果的に表現するために、テルミンの演奏を取り入れた。無音階的で、繊細で時に大胆な手指の動きを必要とするテルミンは、粘菌の動態と非常に親和性が高いと感じたからだ。演奏は、メンバーの後藤那月(学部4年生)が担当した。壁面にはこれまで私が撮りためたくつかの粘菌の写真を投影した。スライドは金子美葵(学部3年生)が担当した。大小島のインスタレーション作品の中で私が語り、それに合わせて金子がスライドを切り替え、バックで後藤がテルミンを生演奏するという構成だ。それらは会場全体と呼応し絶妙なハーモニーとなった。

多核単細胞である粘菌は、無数の個を持ちながらひとつ(全体)として動く。中枢神経がなくともじわじわと広がり、環

からさわ・たいすけ

秋田公立美術大学美術学部アート&ルーツ専攻、大学院複合芸術研究科准教授。1978年兵庫県生まれ。専門は哲学、文化人類学、南方熊楠研究。近年は熊楠の粘菌(変形菌)に関する言説を軸に、華厳思想やハイデガーの存在論などを交えながら、「生命そのもの」を思考する「粘菌哲学」を構想中。野生種の粘菌の生態・動態・形態を顕微鏡で観察し、

動画撮影・編集なども行っている。2019年、第13回湯浅泰雄著作賞受賞。

変換できずに悩んでいたとき、息子に聞くと即座に「トテチコ！」と答えた。これをクラブのメンバーに伝えたところ、即採用された。子どもの発する言葉は、大人より身体化されているのであろうか。逆に言えば、大人になるにつれて、専門用語にまみれ、身体と言葉は分離していくのかもしれない。

この粘菌のライフサイクルの

語りを作るきっかけになったのは、アーティストの大小島真木から「粘菌になって話をしてほしい」という依頼を受けたことによる。「人間以外の目線で世界を語る」というテーマのもと、大小島によって開催された展覧会「大小島真木 コレスポンドダンス」(千葉市美術館、2022年)内の企画の一環として、この語りを披露することになった(写真4)。この語り



写真4：「つくりかけラボ09 大小島真木|コレスポンドダンス/Correspondances」関連イベント「万物は語る」No.3「粘菌」(2022年10月29日) 撮影：千葉市美術館

境に応じてネットワークを形成する。鮮やかな色彩を放ちながら。このような「あり方」を私はまだうまく言語化できないが、トップダウン的な、あるいはヒエラルキー的なものと異なる新たな可能性を感じている。本クラブでは、専攻や専門は関係ない。そもそも粘菌自体がそのような分類や枠づけから外れている存在なのだ。このような対象をモチーフとしている以上、やはり既存のフォーマットにとらわれてはならない。もはやヒューマンスケールすら超えなければならぬ。それは領域横断的というより、脱枠的というべきかもしれない。自由にしなやかに枠をはみ出し個々が連結していく。中心点はなくとも互いに共鳴し合いながらひとつのまとまりとして蠢き、煌めく。筆者は、ここに複合芸術の真髄を見ている。

## 「私」でも「私たち」でもなく Not “I” or “We”

大小島真木

禪とは「一即多、多即一」を知ることだと鈴木大拙はいう。一とは多であり、多とは一である。言葉にすると単純だけれど、体感的に理解することは難しい。現代の私たちは同一性を重視して生きている。同一性とは、あるものがつねにあるものであるということ。つまり、あなたはいつだってあなたであり、私はいつだって私である。もし、あなたが明日からは私であるなんてことになってしまったら、人間社会はたちまち混乱してしまう。

でも、どうやら粘菌はそうなっていないらしい。同一性をもった、一なる自己は存在していないようなのだ。じゃあ、粘菌における自己とはどんなものなのだろう。

2022年10月、私は千葉市美術館で開催した「コレスボンダンス」という展覧会における関連トークイベント「万物は語る」に、唐澤太輔さんと粘菌研究クラブ（後藤那月さんと

金子美葵さん）を粘菌の語り部として呼びびした。

率直に言って、その日の粘菌の語りは抜群の面白さだった。唐澤さんの口を通して次々に繰り返される「ドゥルリンネ」「ギソチヌイ」などの独特の粘菌語と、それらに絡まり合うように後藤さんが奏でるテルミンの幻想的な音色。その日集まった人たちは、束の間だとしても、人間と粘菌のあわいに意識を泳がせていたように思う。

なかでも私が面白いと感じたのは、唐澤さんの粘菌語りに一人称主語がなかったことだ。それは唐澤さんが意識した演出だったのだと思う。粘菌は多核単細胞生物だそうだ。核はたくさんあるのに、細胞としてはひとつ。いわゆる生命活動の司令塔の役割をなす中枢がなく、それぞれの核がそれぞれ判断している。だけど、実体としてはひとつの細胞であり、客観的にはひとつの意思を持った存在のようにも見える。さ

らに粘菌は異なる粘菌個体と融合することもあれば、逆に分裂することもあるという。まさに「一即多、多即一」。

私もまたずっと「私」を疑ってきた。「私」の輪郭とは一般にそうだと考えられているかたちよりも、ずっと曖昧なものなんじゃないか。たとえば、私の中にはたくさんの大腸菌がいるが、最近の研究では彼らが人間の思考や行動、性格にまで、多大な影響を与えることが分かっている。あるいは、私の身体を構成する細胞は、数年間ですべてまるっと入れ替わってしまうことも知られている。同一性をもった一なる「私」は、本当は存在しないのかもしれない。「私」とはつねにすでに「私たち」と不可分であり、あるいはそのどちらでもない何かであり、ちょうど川の水の流れのように、とどまることなく移ろうだけの存在、いや、現象なのかもしれない。そう、

人間は粘菌と同じなのだ。

オートウム、オートウム！ 分裂と融合を繰り返しながら粘菌はココニと成長していく。「私」でも「私たち」でもないものたちの生命の蠕動。とりとめもなく変態していく神秘的な姿は、だけどちよっぴり剽軽で、どこかしらチャームングでもある。



おおこじま・まき

東京を拠点に活動するアーティストおよびアートユニット。異なるものたちの環世界、その「あいだ」に立ち、絡まり合う生と死の諸相を描くことを追求している。インド、ポーランド、中国、メキシコ、フランスなどで滞在制作。

2017年にはTara Ocean 財団が率いる科学探査船タラ号太平洋プロジェクトに参加。

雪が溶けて気温も落ち着いた頃、自身の輪郭をなぞるように身体にLEDテープライトを貼り付けて深夜の住宅街を歩いた。かかとを地面に叩きつけて音を鳴らしながら一歩一歩確かめるように歩くことは決めていた。この「踏み鳴らす」という動作は盆踊りからとった。たとえば徹夜で踊ることでは有名な岐阜県（郡上おどりでは、下駄を履いて地面を踏み鳴らす振り付けが多く見られる。秋田県の西馬音内盆踊りでは草履をザザッと地面に擦り付けて音を鳴らす動作が印象的だ。こうした盆踊りの動きは陰陽道のまじないである「反問」に由来する。地面を足で強く踏みしめる動作には地霊や邪気を鎮めるという意味がある。私が踏み鳴らすのは風景だ。

私はこれまで、風景のなかを歩き、踊り、描くという一連の実践を繰り返してきた。風景には、その場所で行われてき

た人びとの営みの痕跡が歪なまま、なまなましく残されている。なかでも雑草から痕跡を見て取るのが好きだ。街路樹の根本に自生するアロエ、つぎはぎのアスファルトの隙間から生える夏草、誰かにむしられた跡に散らかる千切れた根っこ。雑草の生命力やずうずうしいさまに人間の姿を重ねてしまう。そんな風景が物語る声は小さい。名前こそついていないけれど素通りすることができない風景とその声にたいして、澄んだ身体で向き合うことができないだろうか。目を凝らし、耳を傾け、歩くことで風景を読む。そのために必要な澄んだ身体を手に入れるひとつの方法は踊ることだ。

踊るのは盆踊りとミュージカルの踊りだ。盆踊りは公共の「輪」でありながらも、実際には身体や視線が交わることはない「個」の状態で踊る。盆踊りには30分以上の曲もある。それを絶え間なくループして踊っているとトランスのように

研ぎ澄まされた感覚になることがある。公共空間のなかで個でありながらも普段とは異なる身体感覚へと変化することは「籠り」の経験に近いと感じている。昨年のお盆に秋田県にかほ市の「盆小屋行事」の調査に参加したが、これは海岸の砂浜に藁の小屋を建て、子どもたちがその中で一晩過ごすというものだ。小屋の中に籠ることで神聖な身体を手に入れ、海の向こうからやってくる祖霊と、祖霊を迎える地域の住民たちを橋渡しする存在になる。今は高齢化の影響で子どもが籠る風習はなくなったが、東北では盆小屋やカマクラといった「籠り」に由来する行事が今も行われている。盆踊りはこうした籠りの経験と重なる。私は「個」に籠ることで変化しただ、いつもより少し澄んだ身体で、風景が物語る声に耳を傾け、描くことで物語化し、供養していく。

得意でもない踊りを踊るようになったきっかけは盆踊りではなく、ミュージカルにある。2014年にニューヨークのブロードウェイに行った際にミュージカルを鑑賞した。華やかなものに憧れを持っていた私は本場でミュージカルを鑑賞

できることに浮き足立っていた。だが、クライマックスを迎え大歓声のなか起こったスタンディングオベーションの波にノれず、立ち上がることができなかった。十分な高揚感や感動に包まれていたはずなのにノれなかったというのは、華やかな側の人間ではないと突きつけられたようでショックを受け、しこりを抱えたまま帰国した。帰国後の夏、そんなミュージカルの経験も忘れかけた頃に、たまたま通りかかった小学校の校庭で盆踊りに遭遇した。小さな規模の平凡な盆踊りであったが、万人に開かれた踊りの輪と、それをぶった斬るように縦横無尽に駆け回る子ども、カセットテープのバリバリと音割れた音楽。どれもが祝福的で安心感があり、いても立ってもいられなくなつて輪の中に飛び込んだ。運動神経も悪く上手には踊れないのに居心地がよく、これは自分にとつての身の丈の踊りだと思えた。そんな私がミュージカルの踊りを不器用にも踊ることで自身の身体とおして実存を確かめられる気がする。そして同時に、風景にたいして精一杯祝福の踊りを踊る私に向けて、潜んでいた声たちがミュージカ

ルの華やか過ぎる歓声のように湧き上がって聞こえてくるのではないか。こうしてミュージカルを踊ることが風景の声を聞く手立てのひとつになる。

踊ることで風景と人間を思索してきたが、歩くことも踊りと言えないのではないだろうかと考えるようになった。歩くという日常的な動作の延長に踊りを位置付ければ、風景を常態的に思索することも可能ではないか。これもまた身の丈の踊りだ。そして踊るときだけでも衣服や髪型、体格や性別といった拘束から解放された澄んだ身体を手に入れるために、LEDテープライトを身体に貼り付けた。LEDの眩しすぎる光の輪郭に囲まれることで、それらの内側は純粹な光の影になる。輪郭と影をまといつて踏み鳴らしながら歩く姿を映像に収め、風景と身体をめぐる歌詞をつけたミュージックビデオにした。

先日に行った展覧会は「風景を踏みならす」(英題は *Is Jumped and Beaten Paths*) というタイトルをつけ、鳴らすと均すのふたつの意味を込めた。反閉や盆踊りにおいて同じ道筋をなぞ

み鳴らすことで風景と向き合う。

展覧会は、前述の踏みならして歩く姿を収めた1点の映像作品と13点の木炭画作品を展示し、これらの作品をとおして秋田の市街地から郊外の集落まで、約20キロメートル圏内の風景をめぐる構成にした。木炭画では街灯をスポットライトにして踊る人物がいる風景を描いている。タイトルは画中の土地の住所と踊りの曲名にした。それはその風景が実在し、誰にも知られない踊りが踊られている事実を示す。そして木炭画は彩度のないモノクロームの画面であり、影だ。影は見つめれば見つめるほど、多くの言葉を物語る。

秋田に引越してきて1年半が経った。秋田の風景といえ

## だいたい・しるぶ

秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科助手。愛知県立芸術大学大学院美術研究科博士前期課程修了。美術作家、人の営みと記憶が痕跡として残る「物語る風景」のなかで歩く・踊る・描くといった実践を行う。木炭画を中心に制作し、風景をとおして人間のありかについて思索する。夏には盆踊りライターの活動も。主な個展に「TOKAS-Emerging 2023『風景を踏みならす』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷)。



写真上：踊り場 (秋田市下浜羽川、河内音頭) 2023年  
木炭、麻布、パネル 728×1030mm

写真下：踏みならすかたち 2023年 ミクストメディア

「TOKAS-Emerging 2023『風景を踏みならす』」

(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2023)

撮影：加藤 健 画像提供：Tokyo Arts and Space

るように何度も踏みつける動作は、人間が自分のテリトリーを作っているようにも見える。人は大切に思い愛おしむ風景こそ、所有するために境界を作ったり名前を付けたりする。そうやって「均す」ことは土地を踏み荒らすようでもあるし、守っているようでもある。風景を踏み均すことを自覚し、踏

ば、雪の影響で穴の開いたアスファルトが浮かぶ。夜にはそんなガタガタの道の住宅街をうろろ歩いて踊った。歩いたり踊ったり描いたりするなかで、風景は他人事ではなくなる。雪でどうしようもなくなくなって車を購入してからは、目星をつけた風景の近くまで車で行くようになった。オレンジ色のヘッドライトで広く照らされていた草っ原やアスファルトが、エンジン止めた途端に音もない真っ暗闇に一変してはつとすることが少なくなる。秋田の夜は暗い。いや、夜は暗い。秋田や東北、田舎のことをエキゾチックに見がちだが、考えてみれば日本中どこにいつてもこういう風景だらけだ。アスファルトと電柱、雑草のある風景はどうしようもなく懐かしい。

ここ2年、大東はおもに秋田の街や郊外を歩き、街灯のものと踊り、その姿を木炭画に描いてきた。大東の制作の基調にはふたつの運動がある。ひとつは歩くという水平運動であり、もうひとつは踊るといふ上下運動である。トーキョーアーツアンドスペース(TOKAS)本郷にて2023年におこなわれた個展「風景を踏みならす」に際して作家は次のように述べている。

風景にはびこる営みの物語を、供養の想いをもって踏み「鳴らす」。／一方で人は愛おしむ風景を所有しようとして境界を作ったり拡張したりして踏み「均す」。

鳴らす／均すの重ね合わせは、大東自身がこのふたつの運動に自覚的であることを示している。

大東の木炭画は風景を切り出し、そこにリズムを刻むことで、その「意味」を汲みだしている。それはあたかも自らの身体によって風景の肌理を逆なでするかのようなのである。木炭画のざらつくテクスチャーをそうした肌理のアナロジーとして読むこともできるだろう。

TOKASでの個展における唯一の映像作品《風景を踏みならす》(2023年)は、より直接にそうした風景への言語的介入になっている。映像のなかで、ライトテープでふちどられた大東自身である人形が深夜から明け方の住宅街を闊歩する。下駄の歩みにあわせてテロップが明滅する。テキストは

しかも、両者は切り離しえない。人は囲うことで自然を自らのものとして領土化する。モダニズム建築の例を挙げるまでもなく人間の営みは自然のカオスの否定にあり、それを大東は自然の起伏を「均す」と言う。大東の作品に内在する歩行もまた、風景を自らのものにする行為である。しかし、そうした風景はすでに「まったき自然」ではない。大東の関心・その描画の対象は、人間の手になる景色である。そうした景色はそれが失われ、ふたたび自然に還りつつある時にはじめて発見できるようなものだ。大東の踊りが「供養」であるのは、それが喪失を前提としているからにはかならない。そして大東が描くのは、景色がふたたび自然へと変わっていく時と場所である。歩くことと踊ることは風景の(再)領土化という意味で一体なのだ。

踊りとはリズムを刻むことであり、リズムとは分節化であ

街を歩く作家の心情である。ここでは「歩く」ことが風景を「読む」ことと重ねあわされている。自身を媒介に風景を「可読的なもの」として提示する作家は、一夜を通して風景に近づいていく。姿形をうしない夜の闇に溶けていく様子は作家がついに風景そのものになっていくようであり、本作はそうした自分と世界との境がゆるむような瞬間をとらえている。分節化とその融解という意味で木炭画作品と映像作品は相互補完の関係にある。

歩くこと・踊ること・描きだすこと。大東忍の芸術実践は風景を読むことにつながっている。

## 複合芸術研究賞

複合芸術研究賞は、2017年度入学の第1期生修了年である2019年から、優れた修了研究または制作にたいして本研究科が授与している賞です。選考基準においては、必ずしも「複合芸術」という概念の探求のみが求められているのではなく、そのテーマ設定や研究法などにみられる複合的要素を内包する成果についても積極的に評価しています。これらの受賞論文や作品の蓄積が、将来の複合芸術を定義づける基盤と成ることは言うまでもありません。





妖怪テレビ (修了制作)

2020年

求 源 Qiu Yuan

複合芸術研究科修士課程2期生

留学生である作者は来日後の体験を通じて感じたり考えたりしたグローバルあるいはローカルな話題を映像インスタレーションとして制作した。親しみやすい妖怪キャラクターと分かりやすい構成による、リミテッドアニメーションである。文化や国際情勢、表現手法といった異なるレイヤーの中にアイロニーとユーモアを詰め込んだ、完成度の高いエンターテインメント作品となった。

## 現代アートと他分野との間に立つ仲介者のあり方 ——地域型アートプロジェクトの現場調査から (修了論文)

2019年

蛭間 友里恵 Hiruma Yurie

複合芸術研究科修士課程1期生



芸術祭や国際展に出会ったことがきっかけでアートに関心を抱いた作者は、街中の日常空間にアート作品などが出現する際、それに突然出会うことになる人にアートの価値や面白みを深く理解してもらうには「仲介者」の存在が重要であると考えようになった。また、彼女は秋田でアートプロジェクトの制作に携わる際に、主催者やアーティストと地域とのあいだに齟齬を感じる場面にも多数出会った。その経験から、市民とアーティストの協働を大切にしてきた新潟市の「水と土の芸術祭」に着目し、現場にインターンとして入り、ステークホルダーとなっている人びとにインタビューを重ね、参与観察を軸に研究を進めた。丁寧な取材により、アートの現場における仲介者の必要性を浮き彫りにし、自らのその後の活動にもつながるような、実践的で秀逸な調査研究となった。



人生のプロセスを区切る画像表現と時間観  
 ——「老いの坂」と「人生の階段図」を中心として（修了論文）

2021年

林 文洲 Lin Wenzhou

複合芸術研究科修士課程3期生



筆者は、本論文において、テクノロジーをベースに死生学と歴史学を見事に複合させながら、人生を「区切る」という人間の根本的行為に深く踏み込んでいる。《老いの坂》と《人生の階段図》に関する古今東西の膨大な資料を整理しながら、抽出した重要な要素を比較し、最後まで破綻なく論じ切った。とりわけ先行研究と比べて優れているのは、「ハレ」という概念が「折」と「節」という農業と狩猟に結びつき、それらは「区切り」でありながら緩やかな過渡性を持ち、直感的なものでもあるということ論証した点である。本研究は、今後の複合芸術研究における重要な指標になると期待できる。



個の身体から思考する ——「キウイ大学校」の実践を通して（修了制作）

2021年

日比野 桃子 Hibino Momoko

複合芸術研究科修士課程3期生

作者は、秋田の西馬音内盆踊りや八戸における神楽など、多様な実践に果敢に身を投じながら「伝統や環境に規定される身体の自由と不自由について」考察した。同時に、規範や属性から解放された、誰もが元来有するオリジナルの身体を、野口みち三による「原初生命体としての身体」に依拠しながら「キウイの身体」と名付けた。そして、自らの身体を素材として「踊り」や「体操」といった概念を再定義したうえで、人びとがそれらを獲得するための「教材」を開発し、通信制の「キウイ大学校」なるプロジェクトを運営した。地域文化の実体験とその理論化を理想的なバランスで複合した研究である。





## 多元化された性のための彫刻（修了制作）

2023年

岩瀬海 Iwase Umi  
複合芸術研究科修士課程5期生



トランス・ジェンダーをめぐる問題を人びとに認知させること。作者は、この点をひとつの動機として、近親者、あるいは自身の身体をモデルにした彫刻作品を制作する。それらには、作品を介した鑑賞者とのコミュニケーションはもとより、「多元化された性」への認知を促す視覚的な力がある。修了制作展において作者は、身体の一部を模した複数の彫刻をギャラリー空間に点在させた。鑑賞者は、これらの彫刻から欠落した身体部分を補完するようにイメージするが、作者の彫刻は、そのような安易な視線を跳ね返す。この体験こそが、私たち誰もが潜在的に持つ特権性と加害性を認識する瞬間である。ただ、この作品は対話の生成を意図して開かれており、多元化された性や社会のありようをあえて「彫刻」という保守的な手法で世に問うなど、複合芸術的な視点を内在させた秀作である。



## 「地域に擬態する」アートプロジェクト ——コミュニティ指向のアートプロジェクトがアートの役割と定義を 拡張することに関する研究（修了論文）

2022年

谷口 茉優 Taniguchi Mayu  
複合芸術研究科修士課程4期生

筆者は、本論文において、地域住民が参加者となるアーティスト主導のアートプロジェクトではなく、その場に居合わせた関与者が自ら表現をはじめ「表現が生まれる場」の生成に着目した。そのような活動を「地域に擬態するアートプロジェクト」と定義した上で、地域とアートの二項対立を批判的に乗り越えた。具体的には、鳥取の「たみ」と大阪の「ココルーム」に各1ヶ月滞在し、スタッフとして働きながら、中心人物だけでなく、スタッフや常連客、周囲に関わる人などにインタビューを繰り返し、多方向から丁寧に取材を進め、双方の活動の現在までの変遷、実態、今後の課題を見出した。さらに、擬態がもつ「similar」と「mimicry」という意味合いから双方の活動を考察し、擬態するアートプロジェクトの特徴をまとめあげた点は高く評価できる。





堀 至以 《根や茎》  
2021年 194×156 cm キャンバス、油彩

日本海側から太平洋側へ引越した年に、環境の変化として光に着目し作品を構想した。ベランダで育てていたハエトリソウの花芽が明るい方に伸びる様をみて、植物にとっての移動や運動がどういったものかを考えた。植物は日光に向かって茎を伸ばし、重力を感じて地中に根を伸ばしもする。地表を境に正反対の方向へ進路をとる生長プロセスを念頭に置きながら本作を制作した。空気圧を用いて描画することで重層構造を逆行するように線を走らせている。

## Voice 文化の動きに伴うこと

藤本悠里子（複合芸術研究科修士課程1期生／秋田市文化創造館プログラムコーディネーター）

京都の大学でキュレーション・アートマネジメントについて学んだ私は、複合芸術研究科に1期生として入学しました。修了後は秋田公立美術

術大学と連携するNPO法人

「アーツセンターあきた」に

就職し、現在はアーツセン

ターあきたが指定管理者とな

る文化施設・秋田市文化創造

館で事業の企画制作をしてい

ます。アーティストや専門家、

秋田に暮らす人たち、行政、

地域の企業などとともにプロ

ジェクトを起こし、文化創造

館を拠点に創作活動に取り組

む。そのための企画を考え、

広報物を作り、マネジメント

をすることが主な仕事です。

大学院では自分と異なる専門性を持った同級生たちと、24時間利用可能な大学院棟を一杯使い、授業外の時間も院生室で一緒に食事を作り、夜遅くまで話し込む日々を過ごしました。そこで得た、個々に異なる知識や技術を組み合わせながら、新しいものを創造するスキルや心得は、さまざまな人たちと協働する今の仕事にも役立っています。

また、大学院入学時には、アーツセンターあきたや文化創造館はまだできておらず、美大の周りでもアートのマネジメントに関する育成や雇用があまり進んでいませんでした。しかし、在学中にアーツセンターあきたが設立され、入職後には新しい文化施設の開館とその後の運営に携わることができました。在学時から継続して同じ地域に住み続けることで、地域の文化的な動きや変化に立ち会い、その中で自分の活動も活きていくと実感しています。

ふじもと、ゆりこ 1994年京都府生まれ。京都造形芸術大学を卒業、秋田公立美術大学大学院を修了し、2019年より現職。主催事業などの企画制作を行う。



千秋公園入り口に位置する秋田市文化創造館

## アーティストとしての原点

高梨 麻梨香（複合芸術研究科修士課程5期生/アーティスト）

私は秋田県出身で、秋田公立美術大学の景観デザイン専攻を卒業しました。本学の複合芸術研究科に進んだのは、大学院へ進学するなら2年という限られた時間を有効に活用したいと考えたからです。慣れない土地に引越して、新たなコミュニケーションや関係性を構築するよりも、勝手にわかる環境のなかで、大学施設や先生とのつながりを最大限に活かそうと思ったんです。また、大学院の先生たちが中心になって立ち上げた「AlterShaken」や「旅する地域考」などのワークショップやプロジェクトが魅力的だったことも、大きな動機となりました。

2年間の出来事を振り返ると、印象的なのは2年生の11月から2月にかけて4ヶ月間で7本の作品展示を経験したこと。複合芸術研究科の特徴は、大学院全体がひとつの研究室・ゼミのような少数精鋭の体制にあると思っています。分野関係なく、興味があればいろんな先生にアポをとって話を聞きにいきました。それが私に合っていたし査や副査といった関係性を超えて指導してもらえる環境に恵まれたのはラッキーでした。同期の院生たちとも、ぜんぜん違う研究内容でも視点が似ていたり、互いに影響し合ったり、素敵な経験をもとにできました。同時期

に秋田、東京、福岡と3ヶ所で展覧会があるなど、多忙な2年生の冬を乗り越えられたのは、同期のみんなや先生たちのおかげです。

修了後は、アーティスト・イン・レジデンス（以下、AIR）や展覧会に参加するなど、アーティストとして活動しています。「ノイズ」を主題にしたサウンド・インスタレーションを制作していますが、ノイズを「不要で排除されるもの」のメタファーとして捉え、慣行や社会構造から見える排除の構造に着目しています。建築など都市の視覚的環境の特性に関心を持ち、リサーチを通して、自ら録音・編集した音で作品を構成しています。河岸ホテル（京都）のレジデンス入居者に採択され、オンラインで授業に出席しながら京都と大阪でフィールドワークを行い、その成果を秋田のM1展で発表した経験が原点となっています。

今後も引き続きAIRを中心に活動しながらいろんな展覧会に出展していきたいです。AIRをきっかけに知らない土地に滞在できるのは、好奇心旺盛の割に飽き性の私にはピッタリですし、全国各地に友達や知り合い、思い出ができるのは楽しいです。

ゆくゆくは国際展や芸術祭、憧れの美術館で展示するのが目標です。

たかなし まりか 1995年秋田県生まれ。個展に「香」(Space Lab BUBBLE 茨城、2023年)、「ナラティブの躯体」(河岸ホテル、京都、2022年)。参加したプログラムに「つくこAIRプログラム2022」(旧上庄小学校、福岡)、「ARTIST INN MEIKKAN 2021」(MEIKKAN、福岡) ほか。

## 日本と中国の福祉事業の連携を目指して

李 銳（複合芸術研究科修士課程6期生）

私は複合芸術研究科で障がい者の地域共生社会について研究しています。具体的なテーマは「地域共生社会実現に向けたアートと対話によるプロジェクト実践研究——障がい者が当たり前に地域に根差して暮らすことを指向して」です。芸術活動をおして、障がい者、地域住民、学生の対話やコミュニケーションの機会を作ることを目指しています。

もともと障がい者の芸術活動に興味があり、5年ほど前からボランティア活動をしながら関連分野の研究をしたいと思っていました。そのなかで複合芸術研究科を選んだ理由は、芸術活動に優れた先生がたくさんいること、障がい者の芸術活動の実績が多いことです。また、地域の芸術活動の分野にも多くの先生がいます。そうした環境で学びたいと思い、入学しました。

研究でいちばん心を動かされるのは、リサーチの際に自分らしい方法で自由に表現している人たちの姿を見た時です。イベントなどで参加者の笑顔を見ると、とても嬉しくなります。

一方で難しいと感じるのは言葉によるコミュニケーションです。私は中国出身で日本語が母語ではないため、たとえば地域のおばあちゃんや

おじいちゃんの方言を聞き取ることがとても難しいです。コミュニケーションがうまくとれない時もありますが、地域の人たちはやさしく接してくるので、この難点を克服できています。

留学生活に多少の不安はありましたが、中国人留学生同士で研究に関する難点や進捗状況だけでなく、日常生活の些細な出来事について話し合える環境があります。たとえば、研究の問題点などをみんなにシェアすると、いろんなアドバイスをくれます。落ち込んでいる時は、一緒にお酒を飲んだり、ご飯を食べたりします。日本人のクラスメートも超やさしいので、よく自分の悩みや問題を相談しています。そんな時、これが留学の醍醐味だと感じます。

今後も、引き続き日本で障がい者アートプロジェクトについて研究を続けていく予定です。修了後は日本の障がい者福祉施設に就職し、将来的には日本で障がい福祉に関するNPO法人を立ち上げたいです。今、中国の障がい者事業の状況はあまりよくありません。いつか日本と中国の障がい者事業を連携し、中国で展開したいと考えています。

り・えい 地域団体「たきびっこ」代表。6年にわたり福祉の現場で支援を行う。面倒見がよい。パドミントンのアマチュアで食いしん坊。

## 博士研究より——行為的アジールを立ち上げる

秋田 光軌（複合芸術研究科博士課程）

そもそも自分の関心が、さまざまな専門領域を横断あるいは越境したところにあると感じていた私にとって、特定のディシプリンの中で研究すること自体が困難なものでした。研究したいという自分の気持ちに方向性が定められず、博士課程への進学はあきらめかけていましたが、あるとき知人から秋田公立美術大学と「複合芸術」の話聞き、受験を決定しました。ここなら特定の専門領域に良い意味で縛られることなく、研究を進められるのではないかと直感が働いたからです。

入学してからも、もちろん研究テーマを決めるのは容易なことではなく、入学後に教員とディスカッションを重ねながら、なかなかかたちにならない悩みにも長い期間付き添っていただきました。私自身、大阪で僧侶と幼稚園職員を兼務しており、フルタイムの仕事が続けながら、しかもオンライン中心の院生生活では思うようにならないことも多々ありますが、自分のペースで徐々に研究を進めることができています。

さて、本題である研究テーマや問題関心について簡単に紹介したいと思います。もともと実家の寺院である浄土宗應典院（ちやうとねんいん大阪）で、私の父が20年にわたってアート実践を行ってきた背景から、芸術と仏教をどう

にかして結びつけられないかという着想を以前から持っていました。研究として展開する手がかりになったのは「アジール」という概念です。アジールとは世俗の権力が及ばず、人びとの自由が保証されている「避難所」であり、歴史学者の網野善彦は、たとえば中世の仏教寺院がそうした特異な場所だったことを指摘しました。應典院にとっても「現代のアジール」がひとつのコンセプトだったのですが、現代において仏教寺院がそのままアジールであると認めることには無理が生じます。

そこでアジールを特定の場所そのものとして見るのではなく、人びとの営みによって行為的に紡がれる場のようなものとして捉えよう、と考えました。現在、中世のようなアジールが見当たらないのは事実だとしても、何らかの行為によって立ち上がる「行為的アジール」は現代でもあり得るのではないかと、いうことです。そして、いくつかの先行研究を踏まえながら、アジールを立ち上げる行為の条件として「その人固有の生の形式をかたちづくる」とことと「聖性を感得する」ことの二つを仮設し、應典院におけるアート実践を論文で分析しました。

芸術行為が「その人固有の生の形式をかたちづくる」ということに比べて、「聖性を感得する」とはどういうことなのか、イメージしづらいかもしれません。私が論文で参照したのは、精神科医である木村敏の生命論でした。木村は自身の器楽合奏の経験などに言及しながら、決して可視化できないけれども私たち一人ひとりの生を支えている「生命それ

自身」の次元に、行為を通じて接近する可能性を示唆しています。「その人固有の生の形式をかたちづくる」には他者との差異が重要であり、集団の同一性やそこから派生するしがらみを切断する視点があります。一方で「聖性を感得する」ことは、木村のことはを借りれば「生命それ自身」への接近を通して、他者とのつながりや深いレベルにおける同一性に回帰していくことであり、その両面が必要ではないかということをお察しました。

とはいえ、いまだ「行為的アジール」の概念は十分なものとは言えません。今後の研究の方向性としては、芸術と仏教が重なり合う地点からこの概念をさらに多角的に検討していきたいと考えています。哲学者・鶴見俊輔の「限界芸術」や、法然や親鸞が伝えてきた称名念仏にも「行為的アジール」として再解釈できる余地があると考えており、それらの複合的な考察を通して概念の練りなおしを図っていく予定です。

最後になりますが、博士課程での研究はたしかに大変であるけれども、他者との関わりの中で自分の思考や立ち位置を見つめなおし続ける点で、社会人にとって（もちろん現役の学生の皆さんにとっても）非常に意義のあるものだと実感しています。ここで述べた私の経験が、どなたかの参考になればありがたいです。



あきた・みつぎ 1985年大阪府生まれ。浄土宗大蓮寺副住職。浄土宗應典院主幹（2016～2019年）。

## 自然の叡智をいかす人の営み

鈴木望美（複合芸術研究科修士課程1年）

文化人類学者、クロード・レヴィ・ストロースは『野生の思考』の中で、先住民が植物について卓越した知識を持っていることを明らかにしました。先住民たちが観ていたのは、「進化」ではなく「循環」をよりどころとする世界。彼らは直線的な進歩社会ではなく、絶えず反復する循環型の社会を生きていました。何かを維持、存続させることは何かを進歩させることと同様に優れた知性が求められるのではないのでしょうか。長年、ひとつのものと深く向き合い続けてきた人たちにも、先住民との共通点が見受けられます。たとえば、現代を代表する染織家である志村ふくみさんは、染織という営みについて次のように語っています。

古代の人々は強い木霊の宿る草木を葉草として用い、その葉草で染めた衣服をまとって、悪霊から身を守った。まず火に誠を尽し、よい土、よい金気、素直な水をもって、命ある美しい色を染めた。すなわち、よい染色は、木、火、土、金、水の五行の内におあり、いずれも天地の根源より色の命をいただいたというわけである。

『色を奏でる』（筑摩書房、1998年、9頁）

ことができます。未知の領域に挑むには導き手のサポートが不可欠です。秋田といういわゆる辺境にいながら、未知の領域を開拓できる力量をもつ先生たちの存在はとても大きいと思います。私が大学院を決める最後の決め手となりました。

秋田の風土は、忙しく過ぎる学生生活をやわらかく包んでくれているように感じます。豊かな自然がもたらす穏やかな時間と、ともに学び合う学友との時間は何ものにも代えがたい、かけがえのない贈り物です。

志村は植物染色を「色（植物）の命をいただく」といいます。<sup>\*1</sup> 染織は、単に身にまとうための布を染めるだけではなく、植物の命をいただき自然に宿っている神々の力で悪しき者から身を守る営みだということです。志村の染織は人間と人間ならざるものが見えない力として「いのち」を循環させていることを教えてくれました。

太陽の恵みは養分となって植物を育み、天から降り注ぐ雨が大地を潤します。やがてそれがさまざまな生き物の糧となり、太陽の恵みはかたちを変えて、あらゆる命をつないでいます。彼らの自然にたいする敬意は、深刻な環境問題を抱えている今日の文明社会に大切な教訓を与えてくれるのではないのでしょうか。いま改めて、私たちはどのように生かされているのかという問い直しが必要です。

私は研究を通じて、宇宙的な物質循環から「いのち」を捉えたいと考えています。そのために「進化」ではなく「循環」をよりどころとしてひとつのものと深く向き合い続けてきた人たちの物語を紡ぎたい。ナラティブを紡ぎ土地の伝説や民話に残る古代人の叡智から「いのち」を考察していきます。

複合芸術研究科では領域を横断して芸術を探究することができます。環境が整っています。教員たちの射程範囲は広く、人類学、神話学、哲学や心理学をはじめとする知的な思考方法から、アート、パフォーマンス、デザイン、批評などのテクニカルな手法まで、立体的な助言をいただく



\*1 志村ふくみ「色を奏でる」筑摩書房、1998年、16頁

すずき、のぞみ 2009年、多摩美術大学造形表現学部デザイン学科卒業。公務員、文化財団職員などを経て2023年より在学。

本研究科では、2017年度の開設以来、毎年「複合芸術会議」を全国各地で開催している。本会議は、異なる専門分野を有する研究者やアーティストを交えて、リサーチやフィールドワーク、プロジェクトの成果やプロセスなどを発表、議論し、複合芸術というダイナミズムを展開するための手法を模索するプラットフォームである。

これまで、複合芸術という概念・領域が拓く創造領域の可能性、複合芸術に期待される社会的機能や役割、そして複合芸術の運動による地方と世界の再接続の方法などについて発表および議論してきた。2021年度からは、教員のみならず博士課程の学生によっても企画されており、対面・オンラインを併用しつつ、大学院における最新の研究成果やそのプロセスを国内外に広く発信し続けている。

2017年度 ●「領域を超える創造力」(2018年1月27日、会場||秋田公立美術大学)

岩井成昭、吉岡洋、服部浩之、齋藤精一、志邨匠子、山崎宗雄、井上葉子、岸健太、小田英之

2018年度 ●「複合芸術はいかに可能か？」(2018年9月8日、会場||SHIBURA HOUSE 東京)

岩井成昭、岸健太、相馬千秋、「旅する地域考」参加アーティスト

●「トランスローカルと想像力——越境するアートの方法論」(2018年11月11日、会場||せんだいメディアテーク、宮城)

藤浩志、白杉悦雄、石倉敏明、唐澤太輔

●「移動すること、つくること、暮らすこと」(2018年12月27日、会場||MEDIA SHOP gallery、京都)

藤本悠里子、寺岡海、神馬啓佑、船川翔司、来田広大、國政サトシ、服部浩之、唐澤太輔

2019年度 ●「アステカの芸術哲学」(2019年12月18日、会場||秋田公立美術大学)

アントニー・シェルトン (Anthony Shelton)

●「複合芸術と共異体」(2020年2月23日、会場||アートラボあいち、愛知)

石倉敏明、唐澤太輔、服部浩之、日比野桃子、田村友一郎、宮本一行、吉田有里

2020年度 ●「危機とアート」(2021年1月29日、Zoom配信) 芹沢高志、原万希子、石倉敏明、岩井成昭、岸健太

●「粘菌の視座」(2021年3月15日、会場||秋田公立美術大学) 唐澤太輔、林文洲、山田汐音、齊藤帆奈、三原聡一郎、柚木恵介、石倉敏明

2021年度 ●「複合芸術の幻影(トランス)の在り方とこれから」

展覧会「第1回複合芸術研究科博士課程展」(2022年3月18日~20日、会場||秋田市文化創造館)

宮本一行、藤川史人、佐々木樹、秋田光軌

シンポジウム「複合芸術と生成される「あいだ」」(2022年3月19日、会場||秋田公立美術大学)

唐澤太輔、飯倉宏治、はがみちこ、宮本一行、藤川史人、佐々木樹、秋田光軌、石倉敏明、藤浩志

●「レナマの芸術論」(2022年3月9日、Zoom配信) 中沢新一、石倉敏明、唐澤太輔

2022年度 ●「サバイバル複合芸術」

vol.1「生命——アジールと限界芸術——」(2023年1月29日、会場||船場エクセルビル、大阪) 秋田光軌、上田假奈代、福住廉

vol.2「生存——今日のアジアと限界芸術——」(2023年1月29日、会場||船場エクセルビル、大阪)

数本雄登、アウン・ミヤット・テー (Aung Myat Hay)、トウアン・ミン (Tuan Min)、福住廉

vol.3「根生——詩の視力——詩が根づく《場》とこれから——」(2023年3月18日、会場||コヒコ、岐阜) 佐々木樹、松井茂

vol.4「共生——サバイブするアートの旅——」(2023年3月21日、会場||天神山アートスタジオ、北海道) 宮本一行、服部文祥、石川竜一

●「アートのミトロジー」(2023年3月16日、Zoom配信) 中沢新一、石倉敏明、唐澤太輔

## City of Jinn——精霊の街

岸健太

日没時の礼拝の頃には、乾期のスラバヤの気は若干の涼気を帯びる。不協和音で共鳴するアザインの音層の下では、沐浴を終えたカンボンの住民たちが気まぐれの戯れ事で退屈をやり過ごす。それぞれの定位置に落ち着いた手押し屋台群の油くさい湯気の向こうに遠雷が聞こえると、集落の屋根をスコールが叩きはじめる。長期の植民地時代と旧日本軍による占領、そして国家独立後の開発独裁統治とそれに続く資本主義経済の拡大浸透は、ジャワの庶民から徹底的に「芯となるもの」を搾り取り、あるいは諦念と忘却の権限と交換されてきた。昨日と同じ明日を生きるための権限。人々は雷雨の狂騒が過ぎるのをただ待つ。バックライトの発光で浮かぶいくつもの顔が路地の闇のなかに揺れる。反転した影絵芝居。SNSオビウム<sup>\*</sup>の恍惚。

スラバヤとの往来は10年を超えるが、それが長いのか短いのかはわからない。横浜やシンガポールといった港町を長く根城としてきたからか、あるいはニュータウン育ちの悪癖からなのか、そこに居ながら他の土地に暮らす感覚がいつもある。「ここではな

しないのだが「出張」は多く、私用でも国内各地に頻繁に出かけるために不在がちだ。しかしこちらが本人との要件を思い立つと、それをどのようにして察するのか翌朝にはホテルの部屋の前で待ち構えているのだ。他の住民や関係者も、ゲベン氏との「予定されていたかのような解雇」を経験していると言う。あらゆる空間に存在するゲベン氏は、あらゆる時間に存在する者でもあるようだ。自分の生年を知らない本人の年齢を明らかにするために、おせっかいいも特定の就学年で経験した大きな社会的事件を尋ねることが少なくない。ゲベン氏の回答は尋ねるたびに異なり、「可能性としての年齢」は30代から60代まで及んでしまう。しかし信じ難いことだが、語られる個別の時代経験の整合性はいずれも高く、すべての年齢の可能性は正しいことになるのである。

この小稿はオカルティズムに傾倒したエピソードの開陳を目的とするものではない。どこでもいい、都市居住の現場を訪ね深く関わりはじめると、それぞれの「ゲベン氏」に私たちは出会うはずだ。彼／彼女はコミュニティのあらゆる時と場所に現れ、人を集め、個別に支え、諷いの間に立ち、道化となり、コミュニティの内と外を結ぶ。トップダウンともボトムアップとも異なるカンボンの自己組織的な自治のかたちは、このような都市の精霊たちの奔放な振る舞いから生まれるのかもしれない。俯瞰的な都市観

い何処か」を求めて方々を巡る人生の過程で予期せず東ジャワの商都に漂着したが、かつてはここに本国やアジアの各所からはみ出した日本人商人がひとつの都市勢力を形成していた時期があった。符丁のようで面白い。符丁が連鎖するそれぞれの経路を放して、私たちは「自分の現場」を見つけるのだろうか。

ゲベン氏をはじめて知ったのは、彼のカンボンを調査した2010年の現場でのことだった。カンボンに共通する「個人・コミュニティ・空間・出来事の相互応答の関係」のメカニズムを理解することを目的とした包括調査を現地の学生と若い表現者たちの協力を得ておこなっていたのが、やがてデペロツパーとの地権係争の禍中にあつたゲベン氏を中心としたカンボンの住民運動に巻き込まれるようにして調査を超えたさまざまな協働が始まった。しかしそれを通し、私は彼ら／彼女らのコミュニティ・マネジメントに踏み込み、その深奥を観察・分析できるようになったのだった。瘦身長髪のゲベン氏はコミュニティのサブリーダー的な位置づけで、村落長の右腕として住民をまとめながら、外部支援者の窓口ともなり住民運動を先導していた。とはいえ、ゲベン氏の組織運営の流儀は中庸なものではなかった。一般的な「組織運営」からは大きく逸脱した、本人の神秘的な個性に基づく開放分散的な「組織誘導」とも言えるものである。彼の生業は判然と

の非現実性を、そして無数の庶民の往来と夢の断片の交差が暫定的に結像したものが都市の実体であることを、十数年の時を経て加齢の気配が一向にみられないゲベン氏と話をすると気づかされるのである。

- \* 1 Jinn: アラブ世界における精霊や魔神など超自然的な存在の総称。
- \* 2 Surabaya: 植民地時代の港灣都市から発展したインドネシア第二の都市。東ジャワ州州都。
- \* 3 Azan: イスラム教における礼拝開始を周知する朗誦。
- \* 4 Kampung: マレー語の「村(ムラ)」。本稿では「都市村落」を指す。
- \* 5 Wayang Kulit: ジャワ島の伝統民俗芸能。古代インドの叙事詩を題材とする影絵芝居。
- \* 6 Ojum: 阿片。ケンの実果汁を乾燥させた薬物。陶酔感で怠惰になり、中毒性もある。
- \* 7 旧市街の目抜き通りに現在も「Kembang Jepun (日本の花)」の名称が使われている。

きし・けんた 秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科教授(研究科長)。東京藝術大学美術学部建築科卒業、Cranbrook Academy of Art 建築学科修了。都市居住の適正技術を検討・提案する超領域のアーバンスタディーズを国内外で実践している。インドネシア・スラバヤ市で非政府組織 Operations for Habitat Studies (OHS) を共同主宰。京都大学東南アジア地域研究所(CSEAS)客員教授。

## 複合芸術とは

飯倉宏治

なにやら秋田で面白いことが始まっているようだ……。読者の中にはこんな噂を聞いたことのある情報感度の高い人もいるかもしれませんが。この話は本当であり、その話題の核心は複合芸術に他なりません。この複合芸術なるものは、一体何なのでしょう。フクゴウゲイジュツという言葉は一見すると簡単に理解できそうですが、真に理解することは難しい、そんな性質を持っています。そのため、この文章では複合芸術について簡単に説明しようと思います。

複合芸術と聞くと「複合に関する芸術なのだろう」と思われることでしょう。実に自然です。実際、パソコン売り場などに行くことと「複合機」なる多機能プリンタが販売されています。これは印刷機能のみならず、スキャンやコピーまでできてしまう非常に使い勝手の良いパソコン周辺機器です。このように複数の機能をひとつにまとめることを一般的には複合と呼んでいます。そのため、複合芸術とは複数の芸術をまとめた、混ぜ合わせた芸術であろうと推測してしまっても、何ら不思議はありません。

のでしょうか。先に示したコンピュータグラフィックスの例のように、まったく複合していない単一の芸術を複合芸術と呼んでいるだけなのではないでしょうか。このように複合芸術はその性質ゆえ、陽に定義することはできず、陰に定義することしかできないのです。ここに複合芸術の理解に関する本質的な難しさの一部が存在します。

難解であるとはいえ、この定義をもとに議論を進めてゆくとさまざまな知見が得られます。たとえば、現代社会における複合芸術の有用性です。まったくもって残念なことですが、今や、若者と高齢者、日本人と外国人など、分断をおおる言葉や者たちには事欠かない世の中になっています。このような現実において、複合芸術に伴うさまざまな現象、たとえば領域の越境や境界の消失、transdisciplinaryなどは、それらに抗う一筋の希望のようにも感じられます。紙数の関係上ここでは詳しく説明できませんが、複合芸術に付随して発生するこれらの現象は偶然ではなく必然である――、このようなことも説明可能となります。

本稿は、現在執筆中の関連論文の発表に先立ち、「複合芸術とは何か」についての思索を簡単に説明したものです。「単に合わせれば複合芸術」といった誤解の解消に微力ながら貢献できたのであれば幸いです。一方、なぜ「複合」芸術と呼ぶのかといっ

しかし単に複数の概念を合わせただけの芸術を、複合芸術として捉えることはありません。たとえば、コンピュータで絵を描く「コンピュータグラフィックス」という分野がありますが、これは複合芸術なのでしょうか？ たしかにコンピュータグラフィックスはコンピュータとグラフィックスという複数の分野・領域から構成されるものです。複合機の例から類推すると、複合した芸術として捉えても良さそうです。しかし今や「CG (Computer Graphics)」とも略されているように、一般的にもすでにCGというジャンルとして認識されています。このようなCGなる概念をあえて複合芸術として捉える必要はあるのでしょうか？ もちろんそのような必要はないですし、複合芸術として捉えるべきでもないでしょう。すでに認識が確立されている芸術分野や領域・概念については、それぞれにおいて進化・発展していくのが良いかと思えます。

では、何を複合芸術と呼ぶのでしょうか？ 単に合わせただけでは複合芸術たり得ないのであれば、一体何が複合芸術なのでしょう。結論から言えば、未だ一般的な芸術として確立・認識されていない芸術が複合芸術に他なりません。なんだかまわりくどい言い方です。しかし、ある分野や領域を陽に指し示し「これが複合芸術である」等と定義してしまった場合、それは複合している

点についてはまったく説明できませんでした。これに関しては、内的複合と外的複合について説明しなければならぬのですが、この部分はまさに現在も研究中であり、まだ明確にそのかたちを掴めてはいません。とはいうものの、おぼろげながらその実態を掴みつつある感触もありますので、機会があればこれについても説明できればと思っています。

いーくら・じーじ 秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科教授 Microsoft Product Development Limited 等の勤務の後、静岡大学創造科学技術大学院博士課程情報科学専攻修了。コンピュータグラフィックスおよび画像処理を専門とする。静岡理工科大学講師および准教授を経て、2017年度より現職。博士（情報学）、工学修士、メディアマスタ―。DEP Passport 賞 (Sony Music Entertainment) 等の受賞歴を有する。



## 秋田公立美術大学大学院 複合芸術研究科

Graduate School of Transdisciplinary Arts, Akita University of Art

— 創造領域と社会の変容可能性を「Transdisciplinary Arts（複合芸術）」の視座と実践を通して研究する大学院 —

本研究科の考える「複合芸術」とは、単に複数の異なる領域や技法の同居・合体を意味するものではありません。自らの専門の外に越境して他領域の思想と実践を学ぶこと、その経験を自らの活動にフィードバックさせること、さらにはそこから既存の事物の構成要素や関係性を解体・再配置することの全体を、本研究科では「Transdisciplinary Arts（複合芸術）」の活動であると考えます。

修士課程、博士課程ともに学生それぞれの専門性と研究テーマに立脚しつつ、複合芸術研究を自身の技術や資質を他の専門領域との交わりを通して拡張させる「内的運動」と、外部の社会に介入してそこにある諸要素の複合を積極的に推し進める「外的運動」の並走によって各自の研究を実現させていきます。前者では、素材・技術・手法の尽きることのない複合の試みを通して新たな表現者の力が提案され、後者からは、潜在的な社会的課題が発見されながら新しい役割と社会のかたちが提示されます。専門分化した芸術各領域の形式や枠組みを認めつつ、しかしそれを積極的にはぐらかし解体する冒険的な想像力と行動力の上に、複合芸術は成立すると考えます。

### [修士課程のカリキュラム]

本研究科の研究指導は、「複数形の学び」「異なる知の交流」を重視して、専門領域の異なる教員と学生が関わり学生各自の複合芸術研究を育むチームティーチング（本研究科での呼称は「セッション」）の形式で行われます。カリキュラムは、学生各自の研究テーマで取り組む「特別研究」を主軸として、異なる専門領域から複合芸術の理論と実践を解説する「講義」、多様な創造領域に対応する複合芸術研究の手法を習得する「演習」、学外の地域や組織と協働して社会実践を企画・実践する「実習」により構成されます。

複合芸術科目は、修士1年次の前期には、複合芸術について様々な既存分野の視座から理解することを目的とした「複合芸術論」、そして学生各自の異なる研究テーマを交差させつつ複合芸術研究の手法を実践的に学ぶ「複合芸術演

習」を配置しています。後期には、創造領域の先端的な取り組みの事例と理論を学びつつ複合芸術の可能性を探る「複合芸術応用論」、および行政や企業などの学外組織を協働者（カウンターパート）として社会実践のプロジェクトに取り組む「複合芸術実習」を配置しています。なお、これらの科目は、学生個人が取り組む修士研究を効果的に推進するためのものとして設計されています。

修士課程 1年	修士課程 2年	博士課程 1年	博士課程 2年	博士課程 3年
<input type="radio"/> 複合芸術演習 <input type="radio"/> 複合芸術実習 <input type="radio"/> 複合芸術論 <input type="radio"/> 複合芸術応用論 (実践、理論)	<input checked="" type="radio"/> 学位審査	<input type="radio"/> 複合芸術研究法 <input type="radio"/> 複合芸術表現研究 I <input type="radio"/> 複合芸術理論研究 I	<input type="radio"/> 複合芸術理論研究 II <input type="radio"/> 複合芸術表現研究 II	<input checked="" type="radio"/> 学位予備審査 <input type="radio"/> 学位本審査
<input type="radio"/> 特別研究 I, II * 「セッション」による授業と特別研究の接続		<input type="radio"/> 複合芸術特別研究 I, II, III * 「セッション」による授業と特別研究の接続		

### [複合芸術研究の実践例]

#### 作品制作：

技法、領域、メディアを越境する新たな表現手法の開発

#### 芸術理論：

美術批評、哲学、人類学、ミューゼオロジーなどを通した創造領域の拡張

#### アートマネジメント：

企画立案、広報、運営管理などを包括したプロジェクトの実践

#### アーバンスタディーズ：

超領域の文化実践を通したコミュニティ研究

#### 情報科学：

情報学、情報工学を背景とした芸術表現技術の研究と開発

#### 映像：

映像や映画の制作、アーカイビング、情報発信を通した映像領域の拡張

#### ソーシャルデザイン：

社会課題の解決を目指す超領域のデザイン実践

## [入試情報]

### アドミッションポリシー

#### ◎修士課程

新しい芸術を探求する意欲のある人

グローバルな視野と地域への視点を併せ持つ人

他者と協働しながら主体的に制作や研究に取り組める人

定員：10名（一般推薦および一般選抜〈第1期募集、第2期募集〉の合計）

選抜方法：書類審査・グループディスカッション・面接

#### 一般推薦

出願期間：2023年7月25日（火）～8月2日（水）

試験日程：2023年9月2日（土）

合格発表：2023年9月8日（金）

#### 一般選抜（第1期募集）

出願期間：2023年10月3日（火）～10月10日（火）

試験日程：2023年11月4日（土）

合格発表：2023年11月13日（月）

#### 一般選抜（第2期募集）

出願期間：2024年2月1日（木）～2月5日（月）

試験日程：2024年3月2日（土）

合格発表：2024年3月6日（水）

#### ◎博士課程

複合の視点から自立した研究に取り組み、  
表現手法の拡張や現代芸術の理論化を探究していく人

モノ・コトの成り立ちを解析し、領域を横断する高い観点から、自らの創造性や思考  
の転換に基づく成果によって、芸術領域及び社会に新たな価値を提示する人

現代芸術の研究を通じて、複合の視点からの理論化に取り組み、  
「複合芸術」の体系化を担っていく意欲のある人

定員：2名

選抜方法：書類審査・面接（口頭試問含む）

#### 一般選抜

出願期間：2023年10月3日（火）～10月10日（火）

試験日程：2023年11月4日（土）

合格発表：2023年11月13日（月）

#### 学生募集要項の請求方法

大学院ウェブサイトから直接ダウンロード・印刷

<https://www.akibi.ac.jp/daigakuin/examination/>

#### 入試に関するお問い合わせ

秋田公立美術大学 事務局学生課

Tel：018-888-8105／Mail：kyomu@akibi.ac.jp

#### アクセス

JR「秋田駅」から羽越本線「新屋駅」下車 新屋駅から徒歩15分

JR「秋田駅」から秋田中央交通バス 新屋線「美術大学前」下車 徒歩1分  
「秋田空港」から車で30分

## INFORMATION

### 進学相談会 @オープンキャンパス

日時：2023年10月7日（土）

場所：大学院棟1階（G1S）、オンライン

大学院による作品展示・研究発表、および入試やカリキュラム等の質問に対応する進学相談コーナーを設けております。校舎や設備の見学も可能です。進学相談会はオンラインでも開催予定です。詳しくは秋田公立美術大学大学院ウェブサイトをご覧ください。

### M1展

日時：2024年1月20日（土）～25日（木）

場所：秋田公立美術大学サテライトセンター（JR秋田駅西口前「フォンテAKITA」6階）  
社会実践授業「複合芸術実習」の一環として大学院1年生（第7期生）による「M1展（タイトル未定）」が開催されます。学生各自の「特別研究」をベースとする作品・プロトタイプ・研究・プロジェクトなどがパブリック・エキジビションのフレームで公開されます。

### 複合芸術研究科 第6期生修了研究展

2024年2月15日（木）～19日（月）に「秋田公立美術大学卒業・修了展2024」を開催予定です。修士研究（作品・論文）の展示をはじめ、ゲストを招いたトークイベントや学生企画によるイベント・パフォーマンスなどを予定しています。

Facebook: @grad.akibi

X (旧 Twitter) : @AkibiGrad

Instagram: @akibigrad

## 「複合芸術科目担当教員」

岸健太（きし・けんた） 教授（研究科長）

領域Ⅱアート・パランス・デザインズ、地域資源・マネジメント、東  
南アジア地域研究  
↓43頁

飯倉宏治（いしかわ・こうじ） 教授

領域Ⅱ情報学・フロンティア、計算基礎、地理学  
↓45頁

今中隆介（いみなか・りゅうすけ） 教授

領域Ⅱインテリアデザイン、フアンチャーデザイン、プロ  
ダクトデザイン  
1956年京都府生まれ。1997年より建築家の伊藤嘉  
朗とデザインユニットI&Iを結成。2003年にデザイ  
ン事務所「omeworks」を設立。「日本の伝統文化と現代  
社会の適合性」「構造とフォルムの統一性」をテーマに空  
間・プロデュース、フアンチャー・機器・グラフィックなど  
のデザイン、CI、データベースプログラムといった幅広い  
分野を手掛ける。

唐澤 太輔（からさわ・たいすけ） 准教授

領域Ⅱ哲学、文化人類学  
↓15頁

萩原健一（はぎはら・けんいち） 准教授

領域Ⅱ映像、メディアアート  
1978年生まれ。2007年情報科学芸術大学院大学  
「IAMS」修了。2005～06年、山口情報芸術セ  
ンター在籍。写真表現を主軸に多様な映像メディアを用  
いて作品制作を行う。HD映像による動画ポートレート  
《light seeing spot》に ART AWARD TOKYO 2007 特別賞  
ほか受賞。主な展覧会に、「isopic measure#」（山口情  
報芸術センター、2007年）、「Media/Art Kitchen」（東  
南アジア、2013年）ほか。

福住 廉（ふくずみ・れん） 准教授

領域Ⅱ美術批評  
1975年生まれ。約20年前に美術評論家として活動を開  
始。現在も「共同通信」で毎月展評を連載している。研究  
テーマは鶴見俊輔の「限界芸術」を今目的に再定義するこ  
と。理論のみならず展覧会企画をとおして実践的に探究し  
ている。全国の自治体で開催している、アートについての  
文章講座は、その実践のひとつ。

岩井成昭（いわい・しげあき） 教授、理事

領域Ⅱインスタレーション、映像、多文化芸術調査  
1990年より国内および欧州、韓国、東南アジアの特定  
コミュニティの調査をもとに、映像、音響、テキスト、ワー  
クショップなどを複合的に使用した視覚表現を展開。近年  
は世代間をつなぐワークショップ・デザインや、多文化環  
境における移民と受け入れコミュニティ間との相互交換性  
の調査を進める。2010年よりイミグレーション・ミュー  
ジウム・東京を主宰。

曾根博美（そね・ひろみ） 教授

領域Ⅱアートプロジェクト、コミュニティとアート、アー  
トとレジリエンス

1987年より美術批評、ライター、インディペンデント・  
キュレーターとして活動し、2000年より渡米。ロサン  
ゼルスでアートマネジメントをしながらソーシャルワー  
カー兼メンタルヘルスセラピストとして働く。近年はセラ  
ピー全般のほか低所得者住宅、DVシエラなどでソー  
シャルワークとしてのアートプロジェクトを企画実施。

藤浩志（ふじ・ひろし） 教授

領域Ⅱ現代美術、アートプロジェクト、アートマネジメント  
パブリック・アーツ、アートプロジェクト、都市計画事務所を  
経て藤浩志企画制作室を立ち上げ、美術家・プロジェクト

山川冬樹（やまかわ・ふゆき） 准教授

領域Ⅱパフォーマンス、現代美術、映像・音響  
↓9頁

## 「助手」

尾村匠一（むら・たくみ）

領域Ⅱ美学・芸術学  
↓23頁

大東忍（だいとう・しのぶ）

領域Ⅱ現代美術、絵画表現、民俗  
↓21頁

林文洲（りん・ぶんしゅう）

領域Ⅱ宗教美術、ジェネレーター・アート  
1991年中国・福州生まれ。死を主題とした美術をめぐ

ディレクターとして「拠点づくり」「しくみづくり」「ツ  
ルの開発」等を探究。東日本大震災後、東北の文化施設や  
教育機関に関わり、新しいプロジェクトが発生する状況と  
連鎖を促すしくみについて模索。NPO法人アーツセン  
ターあきた理事長、秋田市文化創造館館長。

石倉敏明（いしくら・としあき） 准教授

領域Ⅱ芸術人類学、神話学  
1997年よりインドやネパール、日本各地で「山の神」  
神話調査を行う。環太平洋の比較神話学や芸術人類学の研  
究に基づき、神話集、論考等を発表。共著・編著に『野生  
めぐり列島神話の源流をめぐる12の旅』『人と動物の人類  
学』『道具の足跡』高木正勝のCD作品とのコラボレーショ  
ンに『タイ・レイ・タイ・リオ・リオ』など。

石山友美（いしやま・ともみ） 准教授

領域Ⅱ映画製作  
2002～04年機関紙アトリエ勤務を経て渡米。米国に  
て建築、芸術論、社会学を学び、在学中より映画製作を  
開始。監督作に『少女と夏の終わり』（2012年）。『だ  
れも知らない建築のはなし』（2015年）。2020年よ  
り秋田県内の各家庭に眠る8ミリフィルムを集める活動  
「秋田8ミリフィルムアンソロジー」を始め、上映会やワー  
クショップなども行う。

くって、美術史・心性史の研究を展開する。特に、中世・  
近世の美術作品の分析を通じて、死生観・人生観・時間観  
に関わる研究を行う。近年、死骸表現の東西比較について  
論考を発表。また、ジェネレーター・アートを通して、「生  
老病死」の視覚的表現を模索する。

堀至以（ほり・ちかひ）

領域Ⅱ絵画、ドローイング  
1988年愛知県生まれ。描くことと眺めることの反復に  
よるイメージの生成過程を主題に油絵を制作している。幼  
少期の落書きや工作、2011年以降描きためているド  
ローイングを制作の基盤とし、絵画のほか手のひらサイ  
ズの立体作品も制作。異なった位置にある霧と雲がひとつの  
かたちを生成するように、1枚の画面の中に複数の距離を  
描き出すことを目指している。

山岸耕輔（やまぎし・こうすけ）

領域Ⅱ映像メディア、身体表現  
1995年石川県生まれ。3Dペンで形取ったモチーフを  
クロマキー合成で透過し、実物のモチーフとスーパーイン  
ポーズさせることで、網目状の不安定なオブジェを風景に  
出現させる。その独特な存在感から、モノと場所の関係を  
見つめ直す映像を制作する。2020年から「移動」をテー  
マに、墓石が都市を徘徊する映像作品などを発表。

# T R A N S

## 01

### Transdisciplinary Arts

発行日

2023年9月1日発行

編集長 福住廉

編集 佐藤恵美

制作 堀至以

デザイン 大里淳

印刷・製本

秋田活版印刷株式会社

発行

秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科

〒010-1632 秋田県秋田市新屋大川町12-3

TEL

018-888-8100 [代表]

Web

<https://www.akibi.ac.jp/daigakuin/>

2016

08/05  
秋田公立美術大学大学院  
設置認可（文部科学省）



複合芸術実習 I (2017)

2017

04/05  
修士課程第1期生 入学  
04/07  
M1スタートアップ：ARAYAの旅

異なる領域への越境や手法の併用によって価値の相乗効果を生み、それまでに存在しなかった新たな次元を創造する。

内にある「複合」とは、個人の中に蓄積される表現技術や知識、視野などを掛け合わせて生み出そうとする過程であり、外にある「複合」とは、対象とするテーマを取り巻く背景や人、制約などの状況を捉えて連携・協働・誘導することによって、多様な気づきや拡がりが生まれる過程です。

事象の複合性に着目した芸術理論の学び、領域を横断した表現拡張の研鑽、社会に即応し具体的な提案から実践を行う実習などを通じて、自らのテーマに基づいた研究を行う。

（『大学紹介冊子2018』抜粋）

06/21  
フィールドワーク：青森ツアー

07/25-29  
オープンスタジオ2017

08/07  
展示見学：リボンアートフェスティバル

08/16  
フィールドワーク：西馬音内盆踊り

08/20  
フィールドワーク：  
かみこあにプロジェクト  
伝統芸能イベント

10/30  
文化施設見学：  
小山市立車屋美術館  
大谷資料館



秋田文化施設リサーチ (2017)



複合芸術実習 II (2018)



フィールドワーク：青森ツアー (2018)

2018

01/16  
文化施設見学：TDK Museum

01/27  
複合芸術会議2018 シンポジウム in AKITA

「表現と思想、芸術領域の中での横断的展開」

「表現者と研究者の分断を乗り越え」

複合の2つ段階：

①「個人の技術として習得される包括性（Comprehensiveness）としての複合」「具体的に言うと、表現者の内面で複数のテーマや表現手段の「複合」することであって、芸術という専門家の内部における「複合」である

②「社会的に生成・実践される超専門性（Transdisciplinary）としての複合」「作家個人が外部と連携・協働を通じた役割を果たして実現する複合」  
学問の分野を超えた領域横断型。

（『複合芸術会議2018 — 領域を超える創造力』抜粋）



「経験採集」プレゼン (2018)

10/22-26  
文化施設見学：山口情報芸術センター

11/11  
複合芸術会議2018：仙台セッション

11/17  
フィールドワーク：青森ツアー

12/27  
複合芸術会議2018：京都セッション



修了研究展 (2019)

2019

02/15-19  
大学院修了研究展

複合芸術は異なる関心ごととの自由な連携により成立します。それは個-共-公という概念から導かれる自己と他者の関係性の枠組みや、複合芸術に期待される社会的機能や役割を想定しつつ、ローカリティとグローバルイゼーションをどのように再接続させるかなど、秋田の風土性に根付く芸術やデザインを複合の視点で拡張・交換することに連鎖します。

（『修了研究展2019カタログ』抜粋）

04/03  
博士課程第1期生 入学

内包複合（Internal Action）：  
知識と技術を自身の中で複合していく  
外的複合（External Action）：  
外の社会（企業・地域）と自身を複合していく  
（『大学紹介冊子2019~2020』抜粋）

11/13-14  
フィールドワーク：青森ツアー



複合芸術演習 (2019)



オープンキャンパス (2019)

02/14-18

大学院修了展 2020

「複合芸術」はアートワールドの更新・再定義ばかりでなく、接続する多数のアウトワールドへの拡張もおこなうものといえるだろう。

自身の専門となる研究対象をより深く豊かに理解し表現するために、多角的な視点によって対象に近づく方法論を獲得する。

(『修了研究展2020カタログ』抜粋)

02/23

複合芸術会議2020：愛知セッション

「複合芸術と共異体」

12/02

フィールドワーク：青森ツアー



M2最終講評会 (2020)

02/17-21

2021 修了展

03/15

複合芸術会議2021

「粘菌の視座」

「内的運動」：自身の技術や資質を他の専門領域との交わりを通して拡張させる

「外的運動」：外部の社会に介入しそこにある諸要素の複合を積極的に推し進める

前者では、素材・技術・手法の尽きることのない複合の試みを通して新たな表現者の力を提案し、後者では、潜在的な社会的課題が発見しながら新しい役割と社会のかたちを提示します。

専門分化した芸術各領域の「型（かた）」を認めつつ、それを積極的にはぐらかし解体する自由で柔軟な想像力と、新たな表現領域や社会的価値の創造の上に、複合芸術は成立するのです。

(『大学紹介冊子2021』抜粋)

04/30

フィールドワーク：秋田酒蔵見学

05/06

フィールドワーク：阿仁、ネコバリ岩

05/13

フィールドワーク：

秋田大学鉱業博物館、秋田県立博物館

土崎みなと歴史伝承館

05/21

フィールドワーク：

阿仁異人館・伝承館、カラミ山

マタギ資料館、くまくま園

08/11

複合芸術演習「滓（スラグ）」展



複合芸術論 (2020)



フィールドワーク：カラミ山 (2021)



M1成果展 (2022)

01/22-26

修士課程1年複合芸術実習成果展

02/16-20

修了展2022

「内的運動」：異なる専門分野との交わりを通じて自身の専門性を拡張させる

「外的運動」：社会に介入してその諸要素の複合を推し進める

異なる領域を内的/外的に重ね合わせることに留まらず、その運動の中から垂直的な「あいだ」を生成する営みであると想定しています。

(『2022第一回博士課程展カタログ』抜粋)

03/19

複合芸術会議2022：

「複合芸術と生成される『あいだ』」

05/06

フィールドワーク：ネコバリ・阿仁

05/21

フィールドワーク：青森ツアー

06/04

文化施設見学：油谷これくしょん

06/21

フィールドワーク：三種町じゅんさい摘み

自らが専門とする領域（=disciplinary）からほかの領域へ越境（=trans）し、さらにはそれと自らの領域を変容（=trans）させることを「複合」の根本の活動理念として研究と教育に取り組んでいます。

他領域の学生や教員の領域の制作・研究と交わることで、各自の領域の内外に効果的な「揺らぎ」が生まれることを期待しています。

(『TD』のインタビュー参照)



複合芸術会議 (2022)



フィールドワーク：三種町じゅんさい摘み (2022)



フィールドワーク：能代市平山はかり店 (2022)

